



へら鮒

Monthly fishing magazine herabuna Contents

「へら鮒」の題字/叶 九隻

No.471
Mar.2005

3

165ページ

管理釣り場割引クーポン券一覽

| | | |
|--------|--------|-----|
| 野田幸手園 | 椎の木湖 | 清遊湖 |
| 谷和原大沼 | 隼人大池 | 上尾園 |
| F.A吉羽園 | 谷養魚場 | 将監 |
| 柳生FP | 筑波白水湖 | 泉堰 |
| 逆井HC | 友部湯崎湖 | |
| 水藻FC | 甲南へらの池 | |

特集

- 11 **真冬の激渋、大歓迎!? 糸井日出男&小柳康秀**
- 72 **40周年記念特大プレゼント当選者発表!!**

COLOR (カラー)

- 22 **野田幸手園 新春お年玉釣り大会**
- 24 **友部湯崎湖 新春へらぶな釣り大会**
- 25 **弁天FC 初釣り大会**
- 26 **名手・石井旭舟がいく、へら鮒出合い旅… へらぶな浪漫街道**
《第二十六回》徳島県 飯尾川
- 34 **新連載 小池忠教 激釣大全**
《第一回》野田幸手園
- 42 **杉山達也のSPLASH BEAT III**
《Vol.10》25尺一閃! 円良田湖網中、底釣りで決める!
- 49 **棚網 久 あなたの夢を叶えます。**
「G魂を注入して下さいッ!」
ドリーマー:半田雄也さん 釣り場:筑波流源湖
- 56 **ダイワ精工 ニューロッド「虎徹」試釣会**
- 57,122 **最狂へら戦士養成所「鮒の穴」**
新春スペシャル対談 パーボン中島×漢タカハシ
- ★AREA REPORT
60,66 大作のセキ(千葉県) 本誌・伊藤洋一
62,69 佐屋川西之森寄せ場(愛知県) 後藤 誠
63,70 分川池(奈良県) 前田誠志
63,71 戸切川(福岡県) 河口正伸
- 134 **竹とともに生きる。**
《第20回》英竿師 米田照明
- 137 **戸張 誠 野釣り道場**
《第十回》【冬を楽しむ身近な釣り場 等々力F.C】
- 142 **チョーチン王・田中雅司の深宙奥義伝承 魚心掌握**
Vol.6【ウキを動かすには「両ダンゴ」なのだ!】友部湯崎湖
- 147 **田辺哲男の「それってどーゆーことよ!」**
《Vol.26》チャンピオンが横利根川で魅せる、意外な得意技!?
萩野孝之の【ナチュラルレスポンス着底】!!
- 152 **吉川ひとみの「へらってヤバイわっ!!」**
《Vol.32》最高に楽しい真冬の釣り堀! in 逆井F.C
- 156 **新連載 稲毛師匠と編集部諸が行く、ODEKO危険度120%**
《第3回》利根本流/長井戸沼排水機場(茨城県境町)
- 159 **全放協 放流バッジ購入のお願い**
- 160 **新連載 私の宝物**
《Tresure.2》ゲスト:吉本亜土さん
- 193 **本音で迫るへら用品インプレッション。へらアイテムメッタ斬り!**
【へら浮子止め糸】 (株)サンライン
- 194 **岡田 清 Deep Side Angle**
《Vol.17》【岡田流厳寒期激釣段底。】三和新池
- 201 **新連載 北川穂積の全国野釣り行脚**
《第2回》加古川(兵庫県)
- 204 **「造り節®」の軌跡 協力:櫻井釣漁具(株)**
- 206 **釣果予想クイズ**
- 208 **フィッシングレディ**
《今月のレディ》佐藤由梨さん
谷養魚場へらの池(千葉県)

MONOCHROME (モノクロ)

- ★AREA REPORT
68 木場潟 (石川県) 山本一朗
- 74 **株式会社モーリス 新社屋 竣工パーティー**
- 76 **新連載 へら鮒釣り 超基本講座**
《第3回》深宙釣りの超基本
- 83 **新連載 あらいしのぶの なぜなぜしのちゃん**
《第3回》「しのちゃん、初釣りに行く」春日部GFC
教授:石井旭舟さん
- 88 **NHCスピリット**
《Vol.18》NHCへらぶなトーナメント ウインターシリーズ 羽生吉浩
- 92 **トーナメンター小林恭之が挑む! 竿頭までぶっ飛ばせ!!**
《Vol.15》野田幸手園 新春お年玉釣り大会
- 99 **江成公隆のトーナメンター、復活への道。**
《Vol.33》底釣りゼミ2005 PART II on Mac
special thanx!! to N.Kitashiro
- 108 **そんなモジリにダマされて… 天野正由**
《その15》一富士、二へら、三オデコ(みのわだ湖~ピン沼川)
- 114 **水辺のプラネタリウム 吉本亜土**
《今月の星空》「両グル底」
- 117 **新連載 どやさー 今月の釣り場 西田美明**
《その3》「くつわ池」
- 126 **野田幸手園新聞**
- 162 **ワクワク管理釣り場情報**
- 169 **小売店情報**
- ★へら鮒BOX
175 里ちゃんの新米編集長雑誌
176 情報発信基地
178 ボイス
185 **鬼東沼新春へら釣り大会**
186 コラム「へら狂おやじと呼ばないで」 白石和弘
187 コラム「日研だより」 日研広報部長・遠藤克己
188 **新連載** コラム「日々是、勉強!」 ホワイト
189 コラム「紀州“想いの竹”のものごたり」 中肇伸行
190 プレゼント発表
191 広告索引
192 編集後記

●今月の表紙●
angler:
糸井日出男&小柳康秀
field:
筑波湖&新潟ひょうたん池
photo:本誌・里
layout:本誌・里

STAFF

●Producer

根本百合子

●Editor in chief

田中里史

●Editor

大場勝良

諸富一秋

伊藤小百合

伊藤洋一

●Planner

〈オフィス・えび〉

藤原 肇



この物語は、
栄光、そして挫折を味わい、
今、再び這い上がろうとする一人の男の人間ドラマである。

江成公隆の トーナメント、 復活への道。

text and photo by Kimitaka Enari and Satoshi Tanaka
業界初、Web連載企画! -のパスが更新予定中! (URL) <http://hesar.yokohamatsurumi.net>

「一歩進んで二歩下がる!?!」

(Vol.33)

底釣りゼミ2005

PART II

on Mac

Special thanks !! to N.Kitashiro

想像以上の反響を巻き起こした底釣りゼミ2005 PART I。「読まなくてもかまわないかも」とは書いたものの、多くの読者に読んでいただけたのは嬉しい限りで、へら釣りのメカニズムへの関心がいかに高いかをあらためて思い知らされた次第だ。

ここで、熱心な読者からのクレームにより発覚した里のミスをお詫びしておきたい。問題は、『先ほど使った「洗脳」という言葉は訂正しなければならない。』というくだり。当然この文の前に「洗脳」が使われていないとおかしいのだが、どこをどう探しても見つからない。特に修正した記憶がなかった里は、江成からのオリジナルを慌てて読み返してみた。すると、

「トントンでは釣れる気がしない」ほどに氏に洗脳されてしまっていたからだが」という文を、

「トントンでは釣れる気がしない」ほどに氏に心酔してしまっていたからだに直していたのだ。これには全く記憶がなく、締め切りギリギリのテンパった状況で無意識に修正してしまったのではないかと推察する。おそらく「洗脳」という言葉に違和感を覚えたのだろうが、後に江成自身が和らげる文を用意しているにもかかわらず、全く余計なことをしてしまったものだ。読者の皆様、そしてアニキ、ゴメン!

さて、今月は早くも三回目*。あの北城氏も飛び入り参加で、いっそうディープな領域へ突入! 読んだら眠れません!?

by 里ちん

*今月から読まれる方へ: ゼロから始まってますんで、今月で3回目なんです。ゼロはどうでもいい?ですが、Iは読んでおかないと、きつとチンプンカンブんです...とゆーわけで、「バックナンバーどぞ♡」。

先月号が発売されて間もなく、北城氏から電話があった。着信に気付かなかった僕は、氏が残したメッセージを聞いた。「記事、読みました。ちょっとチェックしてきましたところがありますね...」

優しい氏はいつも僕を温かく見守ってくれているのだが、さすがに僕は緊張で凍り付いた。「氏に一切断っていない全く僕の創作」の先月号だったが、氏の協力ナシでは有り得なかった前回のゼミの続編と謳う以上、やはり今回も事前に原稿を読んでもらうべきだったと後悔。しかし今回、僕があえて事前に断らなかったのは、時間的な問題はもちろんだが「自分が本当に理解出来ているか試したい」という意味もあったのだ。結果として氏が僕の原稿に対し、氏自身の理論から大きく外れた展開だと感じてしまったとしたら、前回のゼミまで台無しになってしまう危険はあったし、読者の皆さんに迷惑をかけることになってしまう可能性も十分に承知していた。

...で、おそろおそろ電話。

江: すいません! 勝手に色々書いちゃいまして...。次号で修正入れますんで何なりと!

北: いやいや、ほとんど問題ないと思いますよ。それに江成君の記事なんだから何を書こうが自由。気にしないでいいんだよ。ただね、僕の発言として「適当なヒモで実験してみる」といよ。極端な事を言えばりの字だつて動くから「つてのがあるんだけど、これは「風呂の中でやってみて」って言った記憶があるんだけどなあ...。あくまでも水中という前提ということだね。さらにもっと言えば、ヒモではなく釣り糸と言った善。でもまあテーブル上の実験も悪くはなかったと思っよ。実際の水中より厳しい条件でも動きは伝わっ

たということになれば、水中の状態をよりイメージしやすくなるからね。

江: ありがとうございます。ホッとしました。北: じゃあまず、水中がテーブルと比べてどう違うのかという点を考えてみようか。

江成君は水の抵抗が支点になると書いているね。テーブルの摩擦と同じ役目を果たす、と。これをもう少し突っ込むと、水の抵抗とはずなわち水圧。水圧は四方八方から受けるわけだから、片面からの摩擦しか受けないテーブル上のヒモとは大違いだよ。それから、毛糸と釣り糸では素材自体の「張り」が大きく違う。江成君は毛糸のことを「顔を近づけてよく見れば直線」と言い難い。これはつまり「小さなカーブの連続」と言える」と書いていたけれど、釣り糸の材料として主流のナイロンなら毛糸よりもっと直線に近い。動きの伝達に関しては、水中の釣り糸の方がより有利な条件ということになるわけだ。

江: なるほど。ところで、近年は宙底共に「テンション」という言葉がクローズアップされているなと感じています。ナジミ際の動きを説明しようというところから「ハリスの張り」という言葉は意識され出したと思うんですが、テンションという言葉で仕掛け全体が意識されるようになったのはここ数年という気がします。ナジミ際というと、落ち込みや速攻というイメージはまだ強く、ナジませて釣る人には関係ないと思われがちですよ。さらに言えば、「ナジミ際の釣り」という言葉が紹介された当初のその釣りが宙釣りだったせい、底釣りには関係ないと思っている人もまだいるようですよ。

北: 宙でも底でも、ナジませて釣るにしても、ナジミ際の情報は不可欠。それでも宙ならナジめば仕掛けはぶら下がって張るからいいけど。

江: そこなんです。宙ならまだいいですよ。問題は底釣りなんです。底があるために宙ぶ

らりんにならないわけですから、ナジみ切ったハリスが「それなりに」張るかどうかは、オモリから下の距離やエサ・ハリの重さ、そして釣り人の意識で変わってくるわけですね。でも宙でナジみ切った後のテンションを意識していなかった人の多くは、底釣りでも全く意識しないと思うんです。宙底に閉ちすナジみ際はありますが、選択をしない・出来ないは別として、底釣りではやはり「完全底釣り」になってしまいうケースは多いので、これは大問題ですよ。

北：「全く意識しない」は言い過ぎじゃないかな？（笑）以前の江成君だって、悩んだ挙げ句に「トントン」という選択をしたわけだから。底釣りにおいても動きを伝達するためのテンションを考えた証拠でしょう。多くの人が「ズラしすぎるとアタリは出ない」と知っているように、テンションを全く意識していないことはないと思うよ。それが「無意識」だったとしてもね。

江：うーん…。ただ、大きくズラして好結果を得ている人が確実に存在しているという事実がありながら、それはなぜなのかという考察をしてこなかったマスメディアには腹が立ちますね。セオリーとしては今、北城さんが言ったように「ズラしすぎるとアタリは出ない」しかなかつたんですよ。じゃあ「どこまでズラす分には平気なの？」って話になってくるじゃないですか。「何が基準なの？」と。みんな明確に答えられないんですよ。結局、「ズラしてもアタリが出るためのセオリーは？？」ってことになるんです。知っている人は知っていたんでしょうけど、メディアには取り上げられていなかったのは間違いないですから。片手落ちを見逃して来た罪は重いですよ。なにも最新テクニクをタイムリーに網羅しきれないという話ではないですからね。底釣りのメカニズムの根本を成す部分であるだけに、一度でも底釣りの特集を

組んだことのあるメディアには責任があると思います。それも初心者向けの入門的なやつですね。したがってへらに携わるマスメディア全社が対象（笑）。

北：前回にも言ったけど、自分としては別に隠していたつもりはないよ（笑）。みんなそのくらいは分かっているだろうと思っていたからね。それがやはり無意識であるとしてもね。江：聞いてみればたしかに「そのくらい」のことなんですよ（笑）。でもそれがまさにコロンプスの卵だと言えるところなんです。「そのくらい」のことなのになかなか気づけなかった自分自身にもちろん腹は立っていますので、全てをメディアのせいにするつもりはないんです。今だから明かしますけど、実はあの岡田 清君も僕が書いた北城理論を読んだで読んできてね。彼はあまり感情を表に出さないタイプだと思うんですが、「コレだったのかあ！」と激しく興奮していましたから（笑）。

北：本当かい？

江：ええ。へら釣りの技術的な面を見た場合、すでに完成されている釣りがどうかは僕には分かりませんが、発展途上のご真ん中とも感じないんですよ。「新しい釣技なんてほとんどない（から調子に乗るな）。流行の繰り返し。」と北城さんもよく言われるように。ただ、伝承されるべき重要な事柄が、僕らや僕らよりもっと下の若い世代に伝わっていないとは感じます。人によっては「待っている誰も教えてくれない。盗め。」と言うんですが、僕はちょっと疑問なんです。教える側の価値観は人それぞれだし、教わる側も盗むくらいのガッツがある方が素晴らしいと思います。攻略本を読みながらゲームをやる時代ですからねえ…。信じられないかもしれませんが、ゲームソフトと攻略本の発売日にほとんどタイムラグはないんですよ。そんな時代です。で、マニュアルが不備では若い世代は入

って来ない可能性は否定出来ないと思います。北：そんなものかねえ…。

江：と、思いますね。では現在、初心者向けの入門書が全くないかと言えば、そんなことはありません。最初に用意すべき最低限の道具や使いやすいシンプルなエサも紹介されてますし、振り込み方からアタリの取り方まで丁寧に解説されていると思います。ただ問題は、「スタートライン」に立つ人全ての要求レベルは同じなのか？ってことだと思っんですよ。いきなり難しい話題にはそうそうついて来れませんが、ほとんどの場合には不要な情報かも知れませんが、中には一般的な入門書以上のレベルを要求している人もいるかもしれないんです。本気でへらをやってみたいと思ったら、初釣り時にも出来るだけの知識は詰め込んで出掛けたいと思う人もいる筈なんです。とくに他の釣りジャンルから転向してきた人には多いかもしれないですね。例えば同じメーカーが出しているエサなのに、海とへらとでは裏書きのレベルの違いは呆れる程です。粒子の沈下スピードまで数字で出ますからね。そんなジャンルから来たら、「へらってレベル低いの？」って感じちゃいますよ。もしくは「マスターするには経験だけかい？」とか。だとすると途方に暮れちゃいますよ。多くの人は時間が余っていませんから…。で、一般的な入門書をサクッと読み終えて、もうちょっと理解を深めたいなと思っただ時に、選べる本が少ない気がするんです。ちなみに僕は中間レベルの本がないと感じています。要は業界には選択肢を広げて新規参入者をお迎えする義務があると思っんですよ。広すぎて困ることはないと思っんです。選択肢が多くて迷うというのは、選択肢が少ないことに比べたら、贅沢な悩みだと思っんです。

北：やはり江成君はトーナメントより、そっち志向なんだね。

江：いや興味はありますけど…毎月の原稿もヒイヒイ言いながら書いてるんで、とてもじゃないですけどマニュアル一冊編纂なんて無理ですね。時間的にも能力的にも、です。それに釣りはやっぱりトーナメント志向ですからね。釣れなくて萎えても、やっぱり悔しい気持ちは後から湧いてきますので（笑）。今年こそウキ作りを再開したいとも考えています。まあ、今は言いたいことを好きなだけ書かせてもらいながら、のんびりとマイペースで釣りが出来るんで幸せです。無責任と思われるかも知れませんが僕はプロの編集者ではないです。北城理論である「ズラシとテンション」に関してはおそろくセオリーとして認知されつつあると思いますので、将来里ちゃんが出す別冊の入門書？には盛り込まれるのではないかと。おもいっきり他力本願ですけど、それで十分なんです。

北：江成君の気持ちは分かった。ただ、前回のゼミはたった「そのくらい」のことなんだということでは忘れちゃいけないよ。現状で満足や慢心しては進歩がないからね。

江：もちろんです。例えば先月号では「実は水中では釣り人の想像以上に動きは伝わってるのかもしれない」ってところがミソで、最近では多くのトーナメントが口にするようになった底釣りについての沖打ちやテンションの重要性の先の話になりますから…。「またちょっとだけ進んだゾ」っていう気持ちは正直あります。まあ、今後も自分にとって興味のあるテーマや、まだ埋もれているかもしれない「たっただそのくらい」を適当につまみ食いしていきますので（笑）。

北：頑張れ！

アーカー。

先月号の終わりで僕は、オモリをたくさん背負うウキについて考察したいと結んだ。北城氏はこの点についても「実用上は特別問題ないと思う」とコメントしてくれた。ただ、通常のセッティングと比べて何が異なるのかは、きっちりと把握しておかなければならない。

「オモリが大きい分、慣性（ミチイトの突っ張り）が大きく、へらにとつての違和感も大きいかもしれない」というデメリットは先月号ですでに書いた。それでもなおメリットが残る場合には効果があるということになるので、使い時は「やる気のある大量のへらが底にベッタリ」というケースが主だろう。となると、ズラして抵抗を減らす必要はないかもしれないので、ズラシにはお約束の「沖打ち」も必要無いかもしれない。しかし底が平坦である保証はどこにもないため、一定のナジミ幅をキープするためのテンションをかけようとするならば、トントンでもやはり「沖打ち」をするケースはある。この時に見落としてはならない点は、重いオモリは通常のセッティングより沖（遠く）へ落ちるということ。当然、道糸は通常より一段とナナメに張るため、水深に対してウキ下の道糸が短過ぎ、トントンのままでは通常よりはるかに深いナジミ幅を示す可能性がある。長竿ならなおさら。

このまま釣り続けても構わないが、例えば「トップ」一節残しではさすがに釣りづらいで、ウキ下を若干深くする」などの微調整もアリだろう。だがここで、「この微調整はズラしたことになるのか？ ならないのか？」という疑問が湧かないだろうか。「ズラシ」に、「完全に落とし込んで垂直な状態のトントンを基準とする」というような厳密な定義があっ

ただろうか…。

2年前のゼミを読むと、「自分なりの基準」の誤差を認識しましょうという項目がある。そこには「レスポンスの差」という関連事項も載っており、水深が深くなればなるほど戻り切らない傾向が顕著であり「通常よりナジミは深い傾向」だが「そのままでも構わない」と書いてある。これは逆に言えば、戻り切るのが難しい状況下で「普段通り」はおかしいという事になる。もし普段通りのナジミ幅・戻り具合を示す場合、意図的にウキ下を深くしていないとしたら、タチの誤測（ナナメに深く測ってしまった）の可能性が高い。本人はトントンくらいのもりでも、ベタベタと呼べるほどにズレている可能性も否定出来ないということになるのだ。

だがしかし、である。実際の釣りは、ナナメの状態で行われる。落とし込んだつもりでも、とくに長竿であれば垂直は難しい。ナナメになった時点で、誤測で生じた余分な道糸は余分ではなくなる。結果として普段通りのイメージで釣り通せてしまうかもしれない。「だったら小難しく考えなくてもいいじゃないか」という声が聞こえてきそうだが、「誤差を認識しているかどうか」は、やはり重要な問題なのだ。残念ながら、ここで見ないフリをするとは次へ進めない。

竿はそのまま、ウキだけオモリを背負うタイプ（寸法が同じと仮定）に交換したとすると、振り込み方法に拠るところが大きい。交換前より沖へ着底するとすれば、ナジミはそれまでより深くなる筈だ。また、道糸の張りが交換前と比べて強くなる事を考えれば、戻りは良くなったと感じる事になるだろう。「小難しく考えたくない」人でもこの差は感じ取れるだろうが、最初からオモリを背負うタイプのウキをチョイスした場合はどうか。つまり、普段のイメージに近付けようとウキ下を調整することが、果たして普段通りのズラ

シになっているのか？という事である。もしかすると沖への着底による深ナジミと、道糸の張りが強まることでの戻りの良さなどがフラスマイナスゼロとなり、仕掛けのナナメ度合いとウキに表れる情報には全く変化がないかもしれないが、水中では確実に変化は起きている。「釣れるパターンイメージ」は大事だが、カタチだけで追っていると痛い目を見る可能性は否定出来ない。

…と、この項をここまで素直に納得して読みすめてしまった方は、残念ながらもまだ「ズラシの語感」にハマっている。そして北城理論を理解しきれないのだ…。

日々の生活の中で培われた常識をもってすれば、「ズラシ」には底を這うハリスをイメージしてしまいがちだ。真剣に北城理論を読み、底釣りビデオも見、そのイメージを必死に打ち消し「寝ない・這わない」と意識しようとしても、「ズラシ幅」にはどうしてもハリスのたわみ分をイメージしてしまうのだ。僕はそうだった。そしてこの事が、「トップ」一節残しではさすがに釣りづらいで、ウキ下を若干深くするという微調整はズラしたことになるのか？ ならないのか？ という疑問を生む。ハリスを調整するというのが「ズラシ」であれば、道糸がナナメに張った分を補う行為は「ズラシ」とは呼べないことになるだろう。そこで基準が欲しくなる。先ほども書いたが「完全に落とし込んで垂直な状態のトントンを基準とする」というような厳密な定義。しかし完全な落とし込みは不可能なため、そんな定義は有り得ない。ではどうしたら…。

心配は無用。実は北城理論の前には、この疑問自体が生じ得ないのだ。氏の言葉をもう一度思い出してみよう。「仕掛け全体の角度の変化で、ウキはナジミも、戻りもする」

氏にとって「ズラシ」とは、「仕掛け全体の角度を調整する行為である」。

道糸の不足分を補なうつもりだろうがハリスのたわみ分を調整するつもりだろうが氏にとっては同じ事だし、道糸とハリスを分けて考えるその前提が有り得ないのだ。もつと言えは従来の「何センチ」ズラシという概念さえ、もはや氏には関係ない。もちろん訊ねられて答える時には便宜上使おうとしても、氏が変えたのは角度という意識であり、希望の角度にするためのズラシ量（長さ）はウキ下によって変わってくる*からだ（図A）。そのため氏にとっては「仕掛け全体の角度をコントロールするのズラシ」ではなく、「仕掛け全体の角度をコントロールするのが底釣り」と言っても差し支えないだろう。「難しく過ぎる」と度々クレームがあった北城理論。僕の文章の稚拙さも手伝って、読者の皆さんの理解を妨げていたことはお詫びしたいが、ここに至ってそのシンプルさに気付いていただければ幸いである。

この項に入ってから「ナナメ」という言葉を何度も目にしながらも、「仕掛け全体」というキーワードに辿り着けないのは無理もないことかもしれない。すでに出来上がった語感のせいもあるが、底釣りの用語としてもまだ新しい言葉だからだ。多くの読者が読んできたであろう底釣り解説本には一切触れられていない視点。

僕も含め、ある程度の経験を積んだへら師なら、自分にとつての「底釣り」のイメージはすでに出来上がってしまっている。そして無意識にやってしまっていることや習慣を変えるには、強固な意志と膨大なエネルギーが必要となる。が、釣りは遊び。ドクターストップで酒もタバコもやめなければならぬという状況とは次元が違う。「楽しみ方は人それぞれ」。僕には北城理論を押し付けるつもりは全くない。

図A

〈作図：あとりえぐり〉

ズラシ幅と角度の関係
 ※便宜上「仕掛け全体」ではなくハリスのみで、「くの字」と「たわみ」もないと仮定



ハリスのたわみ。

前項では「仕掛け全体の角度をコントロールするのがズラシ（底釣り）」であり、ハリスと道糸を分けて考えるのはナンセンスだと書いた。しかし厳密に言えば、ズラシしていく過程で道糸とハリスはそれぞれ別の動きをしていく。

オモリを境にしてテンションの強弱には差があるため、必ず「くの字」に折れている。そして「くの字」の上下共に（道糸、ハリス共に）直線ではなくたわんでいるが、たわみが大きいのはハリスの方（詳しくは先月号で）という点を念頭に置いて、この先を読んでい

ていきたい。
 沖打ちによるナナメの張り。ナジみ切った時点でのその角度を決定付けるのは、オモリとウキ（穂先）との引っ張り合いだ。両者の折り合いが合った所で止まる。もちろんエサと底面との摩擦も忘れてはならない存在である。摩擦がなければオモリはウキの真下方向へあつという間に戻る、という力が引かれていくからだ。この時注目したいのは、オモリがウキの真下へ向かおうとする力と、エサと底との摩擦のどちらが大きい力かという点だ。「戻り」のメカニズムをおさらいせずとも、よほどオモリを背負わないウキを用いていない限り（例えばチャカ底、オモリの力の方が大きいのは誰にでも分かることだ。この力の差が、特にハリスについて考えなければならぬもう一つの要素を生む。

仕掛けの角度をコントロールするとは言っても、どんなに沖打ちをしたところで道糸部分で見た場合には、角度に上限がある。ズラシを加えていっても、その上限を越えた時点からハリスの角度のみが変化していく事になるのだ。

ハリスの角度の変化。それはすなわち「ハリスのたわみ」の変化である。このたわみこそ、「へらが安心してエサを口にするか否か」のキモであるが、あまり大きな声では言いたくない。「ハリスの〜」というフレーズが独り歩きしてしまえば、またしても「仕掛け全体」という視点が欠落してしまうからだ。それだけは何としても避けたいところだ。

ハリスの素材についても考えてみる。トリアル回避のためにあえて張りのある製品をチョイスするケースも近年では見受けるが、昔からハリスは「しなやかなほど良い」とされてきた。「より自然な動き」・「食い込みやすさ」そんなイメージだろう。さらに同じ銘柄であれば細ければ細いほど、そのイメージは際立つてくる。底釣りにも問題なく適用出来ると思う。が、このイメージにより、ハリスの銘柄や号数以外は全く同じセッティングでも、たわみ方に差が出る可能性が見えた。これはセッティングを考える上でかなり応用が効きそうなネタだと思う。例えば竿天上の底釣りで「これ以上もうズラせない」ギリギリで釣っている時に、重宝しそうだ。ハリスを伸ばせばいいが、決まった長さしか用意していない人は結構いる。しかしもう少しズラしたい…そんな時、号数を落としたハリスがあれば何とかなるかもしれないのだ。

ハリスの長さによるたわみの違いはどうだろう。同じ材質・号数ならば、長い方がたわみが出やすいはずだ。これも応用の効くネタである。例えば通常よりオモリを背負うウキを使用している底釣り。オモリがウキの下へ戻ろうとする力は大きい。当然、オモリがエサを引く力も強いので、ハリスのたわみは通常より小さく直線に近くなる。「もう少したわませることが出来ればカラッパが減るかもしれない」と感じたとする。普通ならさらにズラシを加えていくところだが、限界を超えるとくの字がどんどん大きくなっていく。*の気

釣番付

料金表

| | |
|-----------|---------|
| 50名まで | 55,000円 |
| 51名～75名 | 60,000円 |
| 76名～100名 | 65,000円 |
| 101名～125名 | 70,000円 |
| 126名～150名 | 75,000円 |
| 151名～175名 | 80,000円 |
| 176名～200名 | 85,000円 |

- ・仕上がりは黒一色です
- ・人数は成績表部分のみ数えます

書体見本

- 1.ぐりへの鮒会
- 2.ぐりへの鮒会
- 3.ぐりへら鮒会

- ・番付をインターネットで公開できます（無料）

お問い合わせご注文はお早めに！

取扱店：柴舟 03-3613-2727

ウキや小物の銘入れに 転写シール

初回注文黒一色、300銘で8,500円～
2回目以降同じものをご注文の場合は3,500円～

- ・8書体、8色を御用意しています
- ・角印も作れます

取扱店：

柴舟（東京都江戸川区）

03-3613-2727

佐伯釣具店（神奈川県川崎市）

044-911-3722

SANSUI川づり館（東京都渋谷区）

03-3499-5025

フィッシング中原（神奈川県川崎市）

044-711-8266

鮒仙人（神奈川県川崎市）

044-287-7470

お問い合わせ、ご注文は各取扱店
または下記HPまでどうぞ

office27
あとりえぐり

http://www.office27.com
E-mail:info@office27.com



にかかる…。そんな時、ハリスを伸ばしてみるのも面白い。デメリットは、夕チを測り直す手間があることだ。面倒臭ければ伸びたハリス分だけウキを下げ（オモリ方向へ）もいいが、エサの着底位置が若干ずれることをお忘れなく。

（以下、次号に続く）

*2003年2月号57頁の僕のセリフを引用しておこう。

「けっこうズラしても思ったよりナジんじやうケースがあるように感じます。僕は管理釣り場程度の流れでは長竿いっぱい底釣りで、どっちかっていうと軽めのゴムだけで測る方が多いんですよ。だから実際に水流の影響は受けた状態で測っているわけで、実水深より深く測れている事はあっても、浅く誤測するってのはないと思うんですが…とりあえずいつものナジミを指してズラしていくんですけど、かなりウキを上にならないといつもナジミにはなりにくい気がします。（以下略）」

これはゼミの中で「レスポンスの差」を説明するための前フリとして用意したセリフだが、「レスポンスの差」がなくとも、長竿では「かなりウキを上にならないといつもナジミ（いつもの角度・いつものたわみ）にはなりにくい」のだ。（図Aによく似た図は、前回のゼミでも別の方が書いた底釣り記事にもよく出てくるが、つくづくヒントが隠された図だと思っ…）

僕のセリフの後に続く北城氏のセリフも引用しておく。

「…深ければ深い程斜めになる。仮に浅い水深の時と同じ角度だったとしても、深い方が道糸の誤差が大きい事には変わりはない。タナを測る時に軽いゴムを使っても、測る時に何回かしゃくくるでしょ？ だから実際のエサ打ちの時よりは垂直に近いはず。ということからは、実際に釣る時には斜めになった分、底まで遠回りして仕掛けが到達するわけだから、思っているよりズレていない」という事になる。（以下略）」

これは今となつては、誤解を生む恐れのあるアバウトな表現と言える。底釣りゼミ2005」的に書き直せば、氏の後半部分は次のようになるだろう。

「底まで遠回りして仕掛けが到達するわけだから、思っているよりオモリの位置は高いためにハリスも起きていと言え、つまりハリスはそれほどたわんでいないという事になる」

（注意…ここで引用した二人のセリフは「レスポンスの差」についての会話の一部であり、これだけでは「レスポンスの差」を理解出来ないばかりか、間違ったニュアンスで伝わらない）

てしまおうだろう。興味を持たれた方には、ぜひ全文を読んでいただきたい）

*「く」の字を小さくするにはどうしたらいいだろうか？」「ハリスがたわむと、く」の字はどう変化するのだろうか…道糸は起きる（垂直方向）だろうか？ それともナナメに寝るのだろうか？」

役に立つかはわからなくとも、考えておいて損のないことは、まだまだたくさんある。

来月以降でこのテーマを取り上げるかどうかは未定だが、とりあえず問題提起だけさせていたただいた。

（底釣りセッティングでの究極の目標は、く」の字が小さくたわみが必要十分な状態だから、どんな状況であっても理想に近付けるロジックとデータが必要なのだ。ちなみに究極の目標を追い求め過ぎ、追い抜いてしまったのが「ドボン」である）

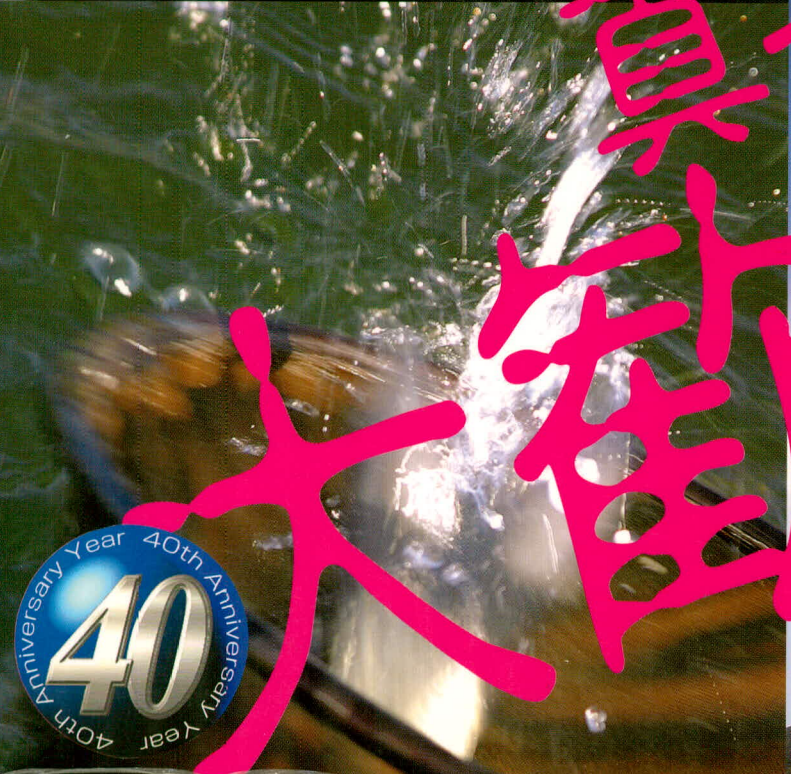
へら鮎釣りの楽しさを追究し続ける...

No.471 Mar.2005

3

へら鮎

Monthly fishing magazine herabuna



真冬の激流 大歓迎!

40th Anniversary Year 40th Anniversary Year

平成17年3月1日発行 (毎月1日発行) 第471号 2005年3月号

厳冬、制覇。



わたのように、ふんわり膨らんでハリに残る!

グルテン量の多さで、バラケ性を抑制。ハリ持ちがよく、膨らみを重視しています。軽く、グルテン繊維が細いので、低活性時の魚の弱い吸い込みにも対応し、アタリを出しやすくなっています。水量を多くしてやわらかいタッチにすれば、厳寒期に効果大。ブレンドの幅が広いのも特長。両グルでも、バラケとのセットでもOK。食い渋り対策に活躍します。

●わたグル

綾織状のグルテン繊維の隙間から、マッシュが抜ける!

グルテン量が多く、軽いタイプ。マッシュのヌケを重視しました。グルテン繊維がハリに絡み付くように残るため、エサ持ちがよく、食い渋った釣況でも食いアタリを待てます。標準水量は「グルテンα21」1に水1.5。硬めに仕上げ、小さくエサ付けて待つ方法は、流れのある釣り場でも有効。また、ボンタッチでバラケ性を強化したいなら「新べらグルテン」とのブレンドがおすすめです。

●グルテンα21

丸マルキュー株式会社
〒363-8509 埼玉県桶川市赤塚2-4

お問い合わせ 本社・桶川工場:048-728-0909 大阪支店:072-824-0909
 合わせ 四国営業所:0877-44-0909 九州営業所:0942-82-0909
 ホームページアドレス <http://www.marukyu.com/>

釣り場でエサに困ったら
 「モード・ホームページ」
<http://www.marukyu.com/i>

